様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月８日現在

機関番号：34526
研究種目：若手研究(B)
研究期間：平成 22～23 年度
課題番号：22730425
研究課題名（和文）
民間教育メディアとしての偉人伝の歴史社会学的研究
研究課題名（英文）
Historical sociology research of the biography as folk educational media
研究代表者
井　上　　義　和　（INOUE YOSHIKAZU）
関西国際大学・人間科学部・准教授
研究者番号：10324592

研究成果の概要（和文）：
山本有三の「路傍の石」（1937）は、明治 30 年代を舞台とする教養小説であるが、昭和 30 年代まで幅広い層に愛読され、民間教育メディアとしての機能を果たした。本研究ではこの小説を題材として、昭和戦前期における「教育システムからの排除」問題について考察した。「路傍の石」が示した解は、教育システムや互助的共同体への包摂ではなく、社会関係資本の蓄積を通じた「独立自尊」の可能性だった。成果をまとめた論文は 2012 年に刊行される予定である。

研究成果の概要（英文）：
Yuzo Yamamoto's "Stone of the Roadside (ROBOH NO ISHI)" (1937) was a Bildungsroman which makes the Meiji 30s the stage. It was read with pleasure by the layer broad till the Showa 30s, and achieved the function as folk educational media. This research analyzed the "exclusion from education system" problem on the topic of this novel. The solution which this novel showed was not the inclusion to an education system or to a cooperative community but the possibility of the "independence and self-respect" by accumulation of social capital.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 22 年度	400,000	120,000	520,000
平成 23 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
年度			
総　計	600,000	180,000	780,000

研究分野：歴史社会学・教育社会学
科研費の分科・細目：社会学・メディア
キーワード：高等小学校、勤労青少年、教育と労働

１．研究開始当初の背景

本研究の関心は、特定の人物の伝記にではなく、昭和期を通じて夥しい種類が刊行された偉人伝というジャンルにある。偉人伝は、伝記文学としての評価ではなく、それとは別の水準・論理で流通したメディアだった。さらに偉人伝は、近代化過程において学校教育と密接な関係にありながらも、それとは別の水準・論理で展開していく民間教育（folk education）の系譜にあった。すなわち、戦前期に「上から」与えられる修身教育と密接に結びついていた偉人伝は、戦後、修身の廃止とともに学校の正課からは排除されたにもかかわらず、装いを新たに全集やシリーズ

ものとして復活し、児童に読まれ続けたのである。教師が薦めなくても親や身近な大人たちが教育的意図をもって児童に買い与えた。あるいは学校の図書室や地域の図書館の児童書コーナーに並べられた偉人伝を児童たちは借りて読んだ。

民間教育（folk education）とは、学校中心の正規教育と異なる水準の教育――民間（folk）の水準で行われる教育的なコミュニケーション（世代間継承）――を指しているが、いわゆる社会教育や生涯教育とも一線を画する。すなわち大人が子供に教育的意図をもって与えるものの、そこに組織性や一貫性はなく、気まぐれや思いつきや偶然の出会いに左右されるが故に、教育学（道徳教育）の対象にはなりにくい。たまに取り上げられても、戦前期の修身教育や立身出世主義のイメージと結びつけられて過去の遺物として否定的に扱われるのみであった。偉人伝のこうした性格は、児童文学や道徳教育といった既存の学問領域にとって扱いにくい一因となっている。

しかしながら、「民間（folk）の水準で行われる教育的なコミュニケーション」は、先行世代が後続世代に対して（あるいは後続世代が先行世代から）何をどのように継承しようとしているかに照準する重要な問題領域である。社会の流動性と複雑性が急激に高まる近代化過程において、偉人伝メディアはひとつの世代間継承のプラットフォームとして機能した。それを踏まえるならば、偉人伝に取って代わるような世代間継承のプラットフォームの構築はいかにして可能なのか、という現代的課題に正面から向き合うことが可能になる。

民間教育は、個々の営みでみれば確かに「組織性や一貫性がなく、気まぐれや思いつきや偶然に左右される」のであるが、その点、偉人伝というメディアは、偉人の顔ぶれには安定性がありながら多様な出版と広範な普及の実績があるため、長期変動を可能にする定点観測の拠点となりうる。

以上述べてきたような、メディア史の水準に照準した歴史社会学的研究の方法の洗練、および民間教育という問題領域の開拓は、道徳教育や児童文学などの既存の研究領域への学術的な貢献が期待される。

２．研究の目的

本研究では、近代日本における「偉人伝」というジャンルの成立過程の解明を通じて、国民国家建設のために「上から」与えられる修身と、江戸期以来「下から」親しまれていた講談という２つの要素を併せ持つ民間教育メディアとしての機能を分析する。

伝記文学としての完成度や人物の歴史的評価や教育方法としての有効性などはいったん括弧に入れ、出版社と図書館を通じて社会に浸透するメディアとしてとらえ、その供給と受容の実態を歴史社会学的に解明する。

民間教育（folk education）の長期的な変動は、こうしたメディア史的な水準での大量データの分布状況、および、学校教育に先立って庶民に親しまれてきた講談や知識青年予備軍を鼓舞してきた西洋の翻訳立志伝などとの関係をみることによって、はじめて捉えることが可能になると考えた。

次項（研究の方法）で述べるように、実際に研究を進めるなかで、ひとつの創作偉人伝を取り上げ集中的に分析することにした。これは、同時代の勤労青少年の置かれた状況に照準して、従来の偉人伝ジャンルに含まれる様々な構成要素を組み合わせて、一個の偉人伝を創作したものである。

３．研究の方法

当初は偉人伝データベースの作成・分析という計量的な方法を想定していたが、研究を進めるなかで、偉人伝的な要素を取り入れた小説（いわば創作偉人伝）、すなわち山本有三の「路傍の石」（1937）に焦点を当てることにした。

「路傍の石」の主人公・愛川吾一は、家が貧しいために中学校への進学がかなわず、父親の借金のかたとして呉服屋の小僧にされる。道端の石ころのように蹴飛ばされながらも自分の生きる道を懸命に模索する姿を描く教養小説であり、かつ、次第に社会に活躍の場を広げていく過程を描く創作偉人伝である。現代の若者にはほとんど読まれなくなったが、かつて（昭和 30 年代頃まで）は中学生までに一度は読んでおくべき本とされ、教育的な機能を果たしていた時代があった。

対象とする時期は「路傍の石」が執筆・発表された昭和 10 年代から小説の舞台となった明治 30 年代までさかのぼる約 40 年間である。この明治 30 年代を舞台とした低学歴勤労青少年の物語は、昭和 10 年代のどのような問題に照準し、それに対してどのように応答したのか。具体的には、以下の点からアプローチしていく。

第 1 に、「路傍の石」が発表された昭和 10 年代において、吾一のような低学歴の勤労青少年たちはどのような状況に置かれていたのか。勤労青少年の転職・不良化問題と彼らの輩出母体となった高等小学校の問題について検討し、作品が同時代の勤労青少年をめぐる問題に照準した現代小説としての意義をもっていたことを示す。

第 2 に、昭和 10 年代の勤労青少年問題に対して、従来の「徒弟制への包摂」が機能不全を起こしつつあったとすれば、他にどのような解がありうるだろうか。明治 30 年代から昭和期にかけて進行した、苦学の多様化と

大衆化について概観したうえで、「教育システムへの包摂」と「互助的共同体への包摂」という二つの解について、その可能性が小説でどのように検討されているのかをみていく。

第3に、「路傍の石」が提示する第三の解とはどのようなものだったのかを考察する。

４．研究成果

成果をまとめた論文は 2012 年中に共著本の一章として刊行される予定（稲垣恭子編『教育からの排除／教育への包摂』明石書店）。その概要は以下のとおりである。

戦前の日本社会では、小説「路傍の石」の主人公・吾一のように、進学できる経済力や継ぐべき家業をもたない多くの少年たちは高等小学校を卒業すると丁稚奉公や職工見習などの徒弟労働に就くしかなかった。それでも従来なら、年季いっぱい勤め上げれば独立の支援が得られ、住み込み修行による修養効果も期待できた（徒弟制の包摂機能）。

しかし第一次世界大戦後の経済変化により、勤労青少年の転職の増加とそれにともなう「不良化」が社会問題として認識されるようになった。徒弟制が従来持っていた「包摂」機能が縮小してきたのである。年季を入れて技能習得に励むことを通じた修養的機能が失われ、賃金を介した雇用契約を結ぶことでささやかな経済的自由を手にした少年たちは、条件の良い職場を求めては転職を重ねる。これが不良化の原因とみなされた。さらに辛い奉公生活を耐え忍ぶインセンティブだった独立（のれん分け）への期待の不確実性が増してきた。

小説が発表された昭和 10 年代には、徒弟制は実質的に崩壊していたのである。義務教育のあと半数以上は高等小学校に通うものの、そこから先は、先行き不透明な徒弟労働が待っている。過酷な奉公生活を耐え忍んでも、かつてのように独立というかたちで報われる保証はない。低学歴の勤労青少年たちは不透明な将来に不安を抱えながら、経済社会の底辺で転職を繰り返していた。「もし上級学校に進学していたとしたら」こんなはずではなかったのに――この「もし」が強ければ強いほど、彼らの不遇感は「教育システムからの排除」に原因帰属される。

「教育システムへの包摂」が次第に自明な解になっていく背景には、専門学校令（1903）に加えて、社会経済的な変動があった。日露戦争後の資本主義経済の発展が、出稼ぎ型の女子労働力に代わる男子労働力への需要を高め、地方から大都市へ青少年の移動を促した。この動きは第一次世界大戦期の景気拡大によって加速した。地方の高等小学校の卒業者が（しばしば徒弟労働を経由して）都市部の商工業などの賃労働に吸収されていく 。他方、明治 30 年代に原型ができた学歴主義は、第一次大戦後には経済社会の隅々まで浸透していたから、徒弟奉公よりマシだったはずの賃労働の職場では、中等学校卒は社員になれるが小学校卒は工員にしかなれないといった学歴による身分格差が生じているのだった。こうして、働きながら講義録や夜学で勉強して、資格取得によるキャリアアップを目指す勤労青少年は増えていた。目標設定や学習方法の選択肢が豊富に用意されれば、「教育システムへの包摂」以外の解はますます想定しにくくなるだろう。

吾一も印刷所で働きながら夜学に通っていた。しかし次第に限界を感じるようになる。また身ひとつで社会に放り出された自分が独立を獲得するのに、既存のコミュニティ（互助的共同体）は何ら力になりえないことを痛感していた。

そこで「貧乏人同士手をつなぐ」のではなく、「金持ちとも手をつなぐ」生き方を模索していく。「手をつなぐ」点で似ているが、吾一は両者の本質的な差異に気づき、互助的共同体への包摂ではなく、社会関係資本の構築を通じた「独立自尊」（福沢諭吉）の道を選び取る。互助的共同体は日常生活の潤滑油のようなものだが、それを支える基盤が揺らいだときには「互助」は機能しなくなる。その脆弱性を見抜いていた吾一は、自分が大変なときに味方になって支えてくれるつながりを着実に作っていく。

「金持ちとも手をつなぐ」というのは、日常や現状から一歩踏み出すときに他者が自分を信用して味方になって動いてくれる、そんな社会関係（つながり）を作ることに他ならない。これを資本としての／資本に転化する社会関係、すなわち社会関係資本と言い換えても同じである。

この社会関係資本の構築は、明治期には「教育システムへの包摂」と並ぶもうひとつの解だったはずだ。明治期は、世襲システムの基盤だった身分社会が解体される一方で、教育システムの整備と普及が完成途上にある過渡期だった。そこでは、従来の身分社会を再生産するだけの互助的共同体とは異なる、新しいものを生み出す社会関係の比重が大きくなる。「路傍の石」の舞台である明治 30 年代は、「教育システムへの包摂」が支配的になる直前だった。その後「教育システムへの包摂」が現実的な選択肢となるにしたがって、社会関係資本の構築のほうは忘れ去られていく。「路傍の石」は、昭和 10 年代の低学歴勤労青少年の問題に照準した同時代小説でありながら、同時代の自明の解ではなく、忘れ去られた解を救い出そうとする反時代小説でもあったのだ。

1947 年、「路傍の石」は鱒書房から単行本として出版されるが、物語の後半がカットさ

れている。これは印刷所で文選見習をしている吾一が次野先生と再会し、先生のはからいで夜学に通えることになったところで終わる。戦後に「路傍の石」を読んだ子供たちのほとんどは、ここまでしか知らない 。にもかかわらず、というより、それゆえにこそ、「路傍の石」は小中学生に愛読された。教育機会が大衆化する時代にふさわしい刻苦勉励物語として、安心して受容されたのである。

「路傍の石」のフルテキストは、仕事と学問の両立（教育システムへの包摂）では終わらず、社会関係資本の構築を通じて吾一が独立自営の道に進む話となっている。今の時代に「路傍の石」を読む意味は、そこにこそあるだろう。親もお金も学歴もない、元手を持たずに身ひとつで社会に放り出された少年が、いかにして生きていくか。現状から抜け出る契機は、つながりしかない。そのつながりをどのように作り、育て、資本に転化するか。社会関係資本の成り立ちの秘密が、ここには描かれている。

つながりの重要性は現代の社会でも教育の現場でも強調されている。ただしそれが、困っている人を助けよう、とか、家族や友達を大切にしよう、とかであれば「貧乏人同士手をつなぐ」（互助的共同体）のと変わらない。もちろんそれも重要なのだが、学校や家族や友達と離れ、自分が人生の主人になるために、他者が自分を信用して味方になって動いてくれる（金持ちとも手をつなぐ）関係を社会のなかでどう構築していくのか。これは誰か他の第三者が作ってくれるわけでもなく、自分自身で作っていくしかない。

偉人伝との関連でいえば、「路傍の石」には吾一がベンジャミン・フランクリンの自叙伝を読む場面がある。フランクリン自伝は、周知のとおり最も有名な偉人伝のひとつである。偉人伝に鼓舞される主人公を描く「路傍の石」は意図的に偉人伝を作中に取り込む再帰的な構造をもっている。なお、岩波文庫版『フランクリン自伝』が刊行されたのは「路傍の石」の朝日新聞連載終了のすぐあと、1937 年 7 月である。しかし岩波文庫版の解説によれば、昭和 10、11 年ごろに「日本の読書界におけるフランクリンの復活」がみられたそうだから、山本有三は小説の構想段階でフランクリン自伝を読みなおしていた可能性が高い。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）
井上義和「低学歴勤労青少年はいかにして生きるか？―「路傍の石」の排除論」稲垣恭子編『教育からの排除／教育への包摂』明石書店、2012 年刊行予定、第 6 章

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
井上　義和（INOUE YOSHIKAZU）
関西国際大学・人間科学部・准教授
研究者番号：10324592

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：